

社会科における思考力・判断力・表現力を育む指導と評価の工夫

木内 貴士（清瀬市立清瀬中学校）

1 分科会発表のはじめに ～後輩である現役学生も多く参会されたことから～

教員の活動は、実に多岐にわたる。朝、生徒が登校する前の教室整備にはじまり、学活、授業、給食指導、放課後には清掃、委員会活動や居残りでの係活動や補習、そして部活動。運動会や修学旅行、音楽祭。多感な中学生は常にくろくろと表情を変え、一方ではじゃれあってはしゃいだり、大声で歌ったり、他方ではトイレに固まって内緒話に花を咲かせたり、黙って悩んでいたりする。動的な存在である彼らに、一律な指導で同等の力を一斉につけることは簡単なことではない。先日、私の学級のある生徒は、他校生とのケンカを起こした。暴力は絶対にだめだ、相手はもちろんのこと自分たちのことだって傷つける。相手が武器を持っていたらどうなる、誘った仲間が訴えられたらどうするつもりだ、高校進学に向けてのこれまでの努力はどうなる、保護者だって深く悩ませることになるのだぞ。これまで私は、社会科の授業で、日本が関わってきた戦争とその影響、愚かさについて十分に取り扱いしてきた、生徒は仲良く協調することに価値を見出しているはずだ。そんな自負は吹き飛びかけ、目の前のこの生徒に、自分のしでかしたことの意味や影響を一から考えさせるのに必死な私がそこにいた。「国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質を養う」一。現行の学習指導要領では、その目標を実現するためのカギの一つに思考する力、社会的事象を考察・判断する力、表現する力などを挙げている。そのような思考力・判断力・表現力を、すべての生徒に身に付けさせていきたい。目の前のこの生徒にも。私たち教員は、その情熱をもって、多岐にわたる教育活動を実践する。時にはこのような生徒指導もある。一度は吹き飛びかけた私の自負だが、彼の中にも授業で学んだことが少しでも積み重なっていることを信じ、あきらめずにまた教育活動に取り組んでいる。それらはまるで、薄い紙を一枚ずつ重ねていくようなことである。

教育活動の中でも特に授業、社会科における思考力・判断力・表現力の育成ということ、私が以前に東京都の教育研究員として取り組んだ研究テーマでもある。今回、母校・明治大学のこの教育会分科会で、当時の研究を中心に発表させていただいた。この場を借りて、発表機会をいただいたことに感謝し、お世話になった先生方に深く御礼申し上げる。

2 ある日のサッカー談義

現役学生を意識して、本題に深く入る前に、次のような話もさせていただいた。

職員室の私の隣に座る一人の同僚。彼はサッカー部顧問を務める。その彼と、部活動指導の談義。彼は私に問う。「木内先生が守備で自陣に一人。そこに相手チーム選手が一人、ドリブルで切り込んできた。その横に相手チーム選手がもう一人いる。この1対2の場合、どのようなことを考えて、どう判断し、どう動きますか？」聞いている私は卓球部顧問。卓球さながら、ボールを直線的に奪いにいくという私の思考・判断・表現は、相手の三角

パスというコンビネーションであっさり抜き去られてしまった。最初から三角パスのことを知っていて、それに対して警戒していたら良かったのだ。「どう動けば、相手は三角パスがしづらい？」と私は質問した。「ドリブラーとそのパートナーの二方向を指さし、一定の距離を取りながら…」という彼の答え。そしてそこへの更なる私の質問。二人で盛り上がったサッカー談義は、「基礎的・基本的な知識・技能がしっかり身に付けば、それを活用して思考・判断・表現ができる」ということを示していた。そして、分かれば面白い。授業で生徒の関心を高めるヒントもそこにあった。さらに、私の質問で、彼の説明もまたぐんと深まるのだ。そのことは、発問の工夫、課題の提示の工夫が、受け手の思考力・判断力・表現力を伸ばすことを物語っていた。次に私が発表する内容も、根底は同じである。

3 東京都教育研究員としての研究（抄）

社会科における思考力・判断力・表現力を育成するために。私は東京都教育研究員の一人として、次のような研究を行った。骨子を紹介する。

【研究仮説】

「よりよい社会の実現に向けて、習得した知識や技能を活用し、社会的事象について考えたことを説明したり、自分の考えをまとめて論述したり、議論などを通して考えを深めたりすることができる学習課題を、単元指導計画に取り入れる。思考・判断・表現した内容を客観的に評価し、指導を繰り返すことで、生徒の思考力・判断力・表現力を育むことができる。」

【研究の方法】

- ①単元指導計画と「指導のポイント」を作成する。
- ②単元のねらいを明確にし、学習課題と「指導のポイント」を生徒に示す。
- ③生徒が表現した内容は、「指導のポイント」に基づいて、生徒が自己評価・相互評価を行うとともに、指導者が評価と指導を行う。
- ④各単元で、①～③の学習を繰り返すことで、思考力・判断力・表現力を育む。

【検証授業・歴史的分野】

(1) 内容

【研究の方法】に沿って、次のとおり検証授業を実施した。①～④は【研究の方法】の各番号と対応する。対象は第1学年。

- ①古代で単元指導計画を作成。そして「指導のポイント」を作成。「指導のポイント」とは、生徒が、思考・判断・表現の学習活動をするときに参考となる評価指標のことである。

(A)「十分に満足できる」状況・・・「(B)おおむね満足できる」状況を満たしている上で、
文章の論理性が優れていて、表現に説得力がある。

(B)「おおむね満足できる」状況・・・次の二つを全て満たしている。

- ・習得した知識，概念や技能を活用し，歴史的
事実に基づいて考察した結果を書いている。
- ・「外国との関係」と「国内の政治」の両面におい
て考察したことを書いている。

(C)「努力を要する」状況・・・(B)を満たさない。

②単元の途中に，それまでの学習内容をもとにして取り組む「学習課題」を設定した。
今回は9時間計画のうち第4時に，「律令国家が生まれた理由を考察し，説明する」と
した。

「指導のポイント」を，平易な言葉に置き換えて生徒に示し，「この課題を第4時に行
う。そこまでの3時間でしっかり基礎的・基本的な知識や技能を身に付けよう」と伝え
た。

③第4時で，「学習課題」と「指導のポイント」を改めて提示し，生徒に取り組みさせた。

- ・まず個人で考察し，ワークシートに解答として説明する。
- ・次に，その解答を班内で発表する。その時，「指導のポイント」に沿って，班員が相
互に意見を出し，(A)(B)(C)評価をする。
- ・班で(A)評価としたものから一つを選び，班ごとに発表していく。聞きながら，学
級の生徒全員が「指導のポイント」に沿って評価をする。
- ・自分の解答に対して出された意見や評価，そして他のすぐれた解答に触れ，生徒各自
が個人でもう一度課題に取り組み，「最終解答」を作成する。
- ・ワークシートを指導者が回収し，「最終解答」を「指導のポイント」に沿って評価する。
後日返却。特に(C)評価の解答については助言を付けて返却する。

④単元の第9時には，「古代とはどのような時代であったのか」という学習課題を設け，
再び①～③の活動を行った。

(2) 成果と課題

ア 成果

- ・「指導のポイント」を生かした指導と評価の一体化により，生徒の意見に深まりが出た
こと。

(例)「豪族の反乱などで，国が土地も民も管理するという必要が出てきた。その方法
を学ぶため，遣隋使や遣唐使を送って，すぐれた政治のしくみを取り入れてい
った。国や朝廷がしっかりした政治を行うために律令国家が生まれた。」

→大化の改新，中国との交流という「国内の政治」「外国との交流」を示す史実
に触れ，そこから日本のより良い社会を目指す意図を見出して表現している。
論理も明快であり，(A)評価とした。

- ・第9時では，級友のさまざまな解答や評価内容を受け，自分の意見をさらに練り直し
て最終解答を構築した生徒も多く見られた。評価が上昇した生徒も出た。

(例) (1回目)

表記なし。(C) 評価。

(2回目)

「律令国家はくずれていったが、隋、唐から真似した文化とちがってたくさん
の技術を少しずつ変え日本独自のものをつくり、国風文化も生まれ始めた、
日本が変わり始めた時代。」

→表現は拙いが、律令国家の形骸化という国内の視点と、中国の影響が少
なくなっていくという外国との関係の視点を備え、表現している。(B) 評価
とした。

イ 課題

- ・「学習課題」を、生徒の実態に合わせて適切に設定すること。

特に第4時について、指導者による評価では(C)評価が全体の半数以上出た。これは
形成的な評価であり、これに助言を付けて今後の思考力・判断力・表現力の向上へと
つなげる意図があるとはいえ、第1学年の生徒にとって、そもそも課題が難しかった
ことは否めない。「少し頑張れば(B)評価に手が届く」レベルに設定する必要がある。

【検証授業・地理的分野】

(1) 内容

歴史的分野の検証授業と同じく、【研究の方法】に沿って行った。対象は第2学年。

- ①東北地方で単元指導計画を作成。「指導のポイント」は次のように設定した。

「問いに対して出された意見の「1 根拠を述べる」「2 根拠が分かりやすく、聞いて
いて納得できる内容にする」「3 根拠を具体的に示す」「4 根拠を述べる際、複数
の視点をもつ」

(A)「十分に満足できる」状況・・・1～4がすべて満たされている。

(B)「おおむね満足できる」状況・・・1が満たされており、2もおおむね満たされている。

(C)「努力を要する」状況・・・1～4がすべて満たされていない、または不十分である。

- ②「学習課題」は、全6時間の単元計画の第5時に「東日本大震災で大きな被害を受けた
東北地方では、今後の人々がより良い暮らしをしていくために、どのような町づくりや
町おこしをしていくべきでしょうか。できれば30年後も続いているような「東北地方
の地域的特色を生かした復興」の姿について教えてください」とした。

そして、「指導のポイント」を、生徒に示し、「この課題を第5時に行う。そこまで
の4時間でしっかり基礎的・基本的な知識や技能を身に付けよう」と伝えた。

- ③第5時で、「学習課題」と「指導のポイント」を改めて提示し、歴史的分野と同様の手
順で生徒に取り組みさせた。

- ④他の地方の学習においても、①～③の取り組みを実施した。

(2) 成果と課題

ア 成果

- ・東北地方の地域的特色を踏まえ、習得した知識や技能を活用し、考察した生徒が大半であったこと。

「東北地方を学ぶにあたっての中核視点は「生活・文化」であったが、「祭り」「伝統工芸品」「観光資源」「津波に備える取り組み」など「生活・文化」の特色を盛り込んで解答した生徒の割合が86%に達した。

- ・本時の活動の結果、半分以上の生徒の思考力・判断力・表現力について、指導者による評価が上昇したこと。

自己評価や相互評価を経たあとの解答で (A) 評価を獲得した生徒が33%上昇して半数の50%に達した。(B) 評価以上を獲得した生徒の数で集計したところ、全体の84%という結果となった。

(例) (1回目)

「祭りを行う。なぜなら、そうすれば他県の人に来てくれて、東北地方の利益が上がる」

→「祭り＝観光客呼び込み＝復興の利益」と思考し、表現している。しかし、学習課題の核である、復興へ向けての町づくりのビジョンは伝わってこない。

「指導のポイント 1」が不十分＝課題に正対していない＝(C) 評価。

(2回目 (自己評価・相互評価を経たあと))

「交通網の整備、定期的な防災対策などを行い、人々の震災に対する意識を高める。さらに、防災対策に関わる祭りを行い、他県の人にも震災について考えてもらう。なぜなら、まず交通網の整備を行わないと、祭りで他県からの来客者が来ず、利益が上がらないから。防災対策と祭りを同時に行うことで、多くの人々に参加してもらえと思うので、そこでも震災に対することを考えてもらう良い機会になると思う。」

→「祭りを防災に関するものとし＝復興の利益だけでなく＝震災について考えてもらう＝そういう町をつくる」と思考し、表現している。「指導のポイント 1」(問いに正対して考察しつつその根拠を)「3」(具体的に述べることができている上)、「4」(多面的・多角的に祭りを位置づけて考察できている)と評価した。また、「交通網の整備」も集客に結びつけており、拙さは残るものの「2」(論理性もある)と判断し、(A) 評価とした。

イ 課題

- ・「学習課題」「評価」について、より一層効率良く設定、実施すること。

東日本大震災という題材は、デリケートな側面を多く含む。多くの文献やインターネット上から情報を集め、東北地方の実地調査まで行うなどして学習課題を設定した。

評価は研究員8人全員で取り組んだ。いずれも、膨大な時間と労力がかかっている。

【研究全体を振り返って】

- (1) (C) 評価の生徒に対して、思考・判断・表現のための基礎的・基本的な知識や技能を定着させる手だてを常に改善することが大切である。
- (2) 「指導のポイント」に沿った活動や評価を繰り返し行うことで、生徒一人ひとりがそれをより一層意識するようになり、自分で自分に不足しているものを見出して、思考の幅を広げたり深めたりしていけるようにすることが大切である。
- (3) 「指導のポイント」を示すことが、かえって生徒の柔軟な思考を縛ったり、最終解答が集約されてしまうことが見られる。1年生のうちは真似ることも有効な学びと考えられ得る。しかし、思考の幅が広がり、深まりつつある2年生以降は必ずしも適切とばかりは言い切れない。「指導のポイント」を学年が進むにつれて抽象的なものに変えていき、徐々に思考の幅を広げる余地をつくっていくことが求められる。

4 分科会発表の終わりに

冒頭にお話しした、ケンカをした生徒。もう3回、似たようなことをくり返してきた彼の口から、ついに待っていた言葉が紡がれた。「これまでその場の感情だけで走ってきたけれど、影響とか心配などが分かった。もうしない」。薄い紙は、また一枚重ねられた。思考力・判断力・表現力とは、計画的に、繰り返し行う中で育まれるものなのだと考える。(了)